

書 評

丹治健蔵著 関東河川水運史の研究：法政大学
出版局，1984年，A 5判，450頁

日本の近世交通史研究の中で、物資輸送に関する研究は、幾つかのすぐれた論文を除いてはこれまであまり注目されない分野であったが、その内でも特に河川水運史は、研究の遅れた分野の一つであった。しかし、「近世封建社会、いわゆる幕藩体制の特質を究明しようとするとき、幕政史・藩政史あるいは農村史などのほか、特殊部門としての交通運輸史の研究がきわめて重要な意義をもっている」と著者が指摘している通り、物資輸送史の研究は決して等閑視できない分野である。その内でも特に研究の少ない河川水運史の問題に著者はとりくまれて、「江戸幕府の直接的基盤」といわれる関東をはじめ、東北・上信越地方と江戸との物資の流通に重要な役割を果たしていた、利根川水運と商品流通の関係を重点をおき、「幕藩領主が関東の河川水運と商品流通の発展にどのように対応しつつあったかという問題」を追究されて、昭和36年以来多くの論文を発表されて来たが、その成果をまとめられたものが本書である。

次に、本書の構成を紹介したい。

- 第1章 関東河川水運発達の沿革
- 第2章 上利根川水運の展開と商品流通
- 第3章 中利根川水運の展開と商品流通
- 第4章 総州境河岸の衰退と商品流通
- 第5章 奥川船積問屋の衰退と登り荷物
- 第6章 上利根川水運の統制と前橋藩・川越藩
- 第7章 関東における川船極印改め制の確立過程
- 第8章 関東における川船支配政策の展開
- 第9章 幕末維新时期関東における川船統制
- 第10章 明治以降における河川水運の衰退過程
- 第11章 信濃川沿岸における一豪商の存在形態
——越後与板町備前屋と西廻り海道——
- 付 録 関東河川水運史関係史料

先ず第1章では、第1節に近世以前の河川水運として、縄文時代の丸木舟以来、「万葉集」や「将門記」、北条氏照判物等に現われる舟運の事実を述べて、古来から河川水運が利用されていたことを指摘する。第2節では近世河川水運発達の前提条件として、河川航路の開発をとりあげ、舟倉了以の開発事業、渡辺友意・河村瑞賢の阿武隅川舟運の開発、水戸藩の紅葉運河開削計画について触れている。第3

節では河川水運発達の要因として、陸上運輸に比して積載量および運賃において優位にあったことを指摘している。ついで第2章では、第1節で上州倉賀野河岸をとりあげ、その成立に領主廻米が大きな役割を果たしたとし、そのような御用河岸であったが、元禄期以降の既成河岸の衰退する時期にはあまり大きな打撃を受けず、近世後期になって衰退する。その要因は、地方の米穀市場の展開により領主米・商人米輸送の減少にあったとする。第2節では、上州平塚河岸をとりあげ、この河岸の成立には足尾御用銅の廻送が大きな要因となったことを指摘し、またこの河岸をめぐる争論や積荷物の動向の分析から、河岸問屋に対する百姓手船や船頭・船持の台頭を指摘している。

第3章・第4章は、中利根川を中心として、奥州から鬼怒川を下って境河岸を通り江戸へ向う荷物のルートと、鬼怒川と利根川との合流点まで下り、布施河岸から江戸川付の河岸へ陸送して江戸へ向うルートとの抗争を通して、布施河岸の盛況と境河岸の衰退を説き、その要因究明に、奥州荷物（特に煙草荷物）の産地の移動から生産構造の変化の分析にまで目を向けている。第5章では、これまでとは逆に、江戸から関東・東北各地へ積み出す登り荷物を扱う問屋である奥州船積問屋をとりあげ、その機能の分析からはじめ、衰退の要因を関東内部の生産のたかまり（特に衣料関係品）と問屋を通さぬ直積み・直揚げの増加に求め、特に天保の株仲間解散令の打撃が大きかった点を指摘していることは注目される。

第6章から第10章までは、幕府・個別領主が河川水運をどのように統制し、支配したかという問題である。まず第6章では、前橋藩領であった上州川井河岸を例として、領主河岸支配の実態を明らかにし、幕府と領主の二重支配の問題を論じている。また第7章から第9章は、幕府の水運統制・川船支配政策の変化を、近世初期から幕末期まで一貫して追究されたもので、著者の特も得意とする分野である。まず近世初期の川船奉行の成立から説きおこし、極印改め制の確立、享保期の川船支配機構の改革、宝暦・天明期における川船支配強化策、寛政期の農村小船の統制強化、幕末期の年貢・役銀収奪強化策を論じ、維新政府の川船支配と船税制度の確立に及んでいる。第10章は、明治期以後における河川水運を問題とし、

その衰退の過程と要因を追究する。明治初期においては、川蒸気船の就航、見沼通船会社の設立など、なお水運の盛況を指摘するが、栃木県・埼玉県下の河川水運の状況をつぶさに検討され、結局は明治16年以降の鉄道の普及発達と、明治30年代以降の河川改修工事や取水堰の建設等によって衰退するという結論をみちびき出している。

第11章は、関東を離れて、越後信濃川水運を問題とする。特に信濃川沿岸与板町の廻米問屋備前屋を中心に、地方豪商の経営を分析し、その経営規模の拡大と大名貸・大板廻米との関係、宝暦期を転機に衰退してゆく過程などを、信濃川水運との関連で追究している。

以上が、本書の概略であるが、著者の意図するところを十分に紹介できたかどうか心もとない。読者諸氏は直接本書をひもといて、博学多識な著者の論述に接していただきたい。そこにおいて著者は、多くの史料を駆使しながら、細かい事実を積み重ねて理論を実施していく。それが前述のように研究の少ない河川水運史という分野であるだけに、本書の持つ意義は非常に大きい。学会に寄与するところ多大であることは疑いないところである。

なお最後に、関東河川水運史関係史料として、上利根川の河田家文書・北川家文書・高橋家文書・清水家文書等の内から重要なもの67点が収録されており、研究者に多大の便宜を与えられていることを附記しておきたい。
(川名 登)

川村博忠著 江戸幕府撰国絵図の研究：古今書院、1984年、A5判、534頁

昨今、地図史ないし地理学史上の既往の業績に対し、これらが進化論的<パラダイム>にたつという理由で、一概に貶けることが、一部の人の間で流行しているようである。私としても、例えば古拙な絵地図の中から、それを生んだ社会の世界観を抉剔する彼らのメスの動きを鮮かとするにやぶさかではないのだが、ここにとりあげる川村博忠博士の内実のつまった鬱然たる大冊を前にすると、才あるかの人たちの<解説>の試みなどは、とたんに単なる<知的遊戯>にすぎなかったような錯覚におちいるのである。

従来とも幕府撰国絵図のもつ重大な意義は誰しもの承知するところだったが、研究の実情は、各研究者が何らかのゆかりをもつ個別国絵図の考証に沈潜

するか、あるいは一般研究としては、かの「好書故事」に近藤守重が僅かに書留めたところを、ほとんど唯一の拠りどころとする有様で、日本地図史・日本地理学史の概説書の類にも、せいぜい一節か一項をもうけ得る程度の研究・史料の蓄積しかもたなかったのである。川村氏は、このような水準にとどまっていた国絵図研究の領域に、一挙に龐大な史料群を搬入し、それだけでも本書の価値を高からしめるに十分なのだが、それらの精緻な分析を通して、記載内容・絵図様式から、国絵図作成にかかわる幕藩両サイドの組織、彼ら絵図方役人の実務等々にまでわたって、このプロジェクトの全容を明らかにしてみせたのであった。しかも、それは単に最初の体系的研究というにとどまらず、随所に新しい知見がちりばめられているのである。

このめざましい成果は、関連研究文献の徹底した博搜、諸藩側の史料の飽くなき渉猟のたまものであると思う。つまり、これらの<発見>は、たまたま仄いたアイディアとか思いつきの類ではなく、上記の博搜と渉猟がもたらした山積する諸データを、入念に照合検討してゆくと、必然的に、そこに到達すべくして到達するというようにして、氏が見出した新天地なのである。この浩瀚な書物を限られたスペースで紹介することは困難でもあり、無意味にも思えるので、以下には努めて、この種、研究史に加えられた新たなページを中心に述べさせていただく。

本書は「序論」と「結論」との間を、第1篇「東洋における官撰地図の系譜」、第2篇「江戸幕府撰国絵図の系統的研究」、第3篇「江戸幕府撰日本総図の展開」、第4篇「国絵図調整の個別的研究」で構成する。いきなり苦言を呈して恐縮だが、第1篇はわざわざ独立の篇だてにするまでもなく、「序論」の「一、研究史の概観」に吸収させるか、あるいは「二、本研究の目的」において、中国そしてわが国古代律令国家以来の伝統の官撰地図・地誌事業の系列のなかに位置づけて、今回のテーマも扱われるものであることを述べればよかったと思う。というのは同じく「篇」といいながら、第2篇以下は質・量ともに充実度が違うからである。

第2篇こそが本書のメインであり、慶長(第1章)、寛永(第2章)、正保(第3章)、元禄(第4章)、天保(第5章)の各期の国絵図を、順次、研究対象とする章節構成である。第1章では、これまでに知